

出エジプト記19章2-8節 a  
ローマの信徒への手紙5章6-11節  
マタイによる福音書9章35-10章8節

本日は、礼拝の中で、講壇用聖書の祝福をいたします。聖霊降臨日から聖書に、「聖書協会共同訳」を用いてきましたが、やっと講壇用の聖書が届きました。『聖書』の日本語訳は、わたしたちの教会の創立よりも少し前の1887年の『明治元訳』から始まって、1917年『大正改訳』（新約のみ）、1955年『口語訳』、1978年『共同訳』（新約のみ）、1987年『新共同訳』、そして2018年今回の『聖書協会共同訳』があります。それ以外でもプロテスタント教会が用いている「いのちのことば社」の「新改訳」「新改訳2017」や、カトリック教会の修道院のもの、個人訳、特定出版社の訳もあります。英語圏の種類に比べると少ないですが、結構な数となりました。翻訳を比較するだけでも、『聖書』の学びは深まると思います。

さて、本日の旧約日課は、「出エジプト記」、エジプトを旅立ったイスラエルの人々が、シナイ山に到着した際の物語です。日課は、19章2節から始まっていますが、省略されている1節には「**イスラエルの人々はエジプトの地を出て、三度目の新月の日にシナイの荒れ野にやって来た**」とあります。出エジプトの旅を、約三か月を進んだときのお話です。

この出エジプトの道筋は、はっきりしておりません。ただし現在のエジプトの首都カイロから、シナイ山と思われる山まで、直線距離でも約350キロあります。そしてその地域は、ほとんど草木がありません。つまり水がありません。「**彼らはレフィディムをたつてシナイの荒れ野に入り**」（出エ19:2）とありますが、「レフィディム」は、イスラエルの人々が、水がないためにモーセに不平を言った場所でした。本日のお話の後には、シナイ山における十戒の授与のお話が続きますので、本日のお話はその直前の場面です。

主のある神様はモーセに、自分がヤコブの家、つまりイスラエルの人々をエジプトから導き出し、エジプトの軍勢から守ったことを伝えます。そして、「**それゆえ、今もし私の声に聞き従い、私の契約を守るならば、あなたがたはあらゆる民にまさって私の宝となる。全地は私のものだからである。そしてあなたがたは、私にとって祭司の王国、聖なる国民となる。**」これが、**イスラエルの人々に語るべき言葉である。**」（出エ19:5-6）と語ります。これらの文言は、主なる神様とイスラエルの人々との関係、そしてイスラエルという人々とは何かを、端的に示す言葉といえます。イスラエルは契約の民と言われますが、それはイスラエルが何もしなくて成立するような、受動的な契約関係ではありません。

イスラエルが、自らの意志で律法を守った時成立するという、能動的な契約関係にほかならないのです。その時、イスラエルは、主なる神様の「宝」であり、主なる神様にとっての「祭司の王国、聖なる国民」になります。「祭司の王国」とは、主なる神様が王であり、その王への祭儀を行う集団ということです。「聖なる」とは、律法を守り、主なる神様のみを信じるからこそ、他の民とは別にされる集団であるということです。そして、これらを通して、イスラエルは、全ての民の模範となるのです。

モーセは、主なる神様の言葉を受け、次にイスラエルの人々に語ります。すると人々は、「**私たちは、主が語られたことをすべて行います**」(出エ 19:8)と口をそろえて宣言します。主なる神様へのイスラエルの理想的な答えがここにあります。しかし、『聖書(旧約)』は、理想ばかりを語る文書ではありません。ここに至るまでに、すでに理想とは程遠い、イスラエルの人々の姿が描かれていました。イスラエルの人々は、食べ物が不足すると、エジプト時代は食べるものがいっぱいあったと、食べ物の中で不平を言っていました。そしてマナとうずらを出してもらいました。また水が不足すると、水がないと不平を言っていました。そして岩から水を出してもらいました。不平を言うたびに、主なる神様から様々な恵みをいただいて、なんとか続いていた集団がイスラエルです。ここで「**私たちは、主が語られたことをすべて行います**」と宣言するのですが、その後も神様を裏切ってしまう。ことに、モーセの帰りが遅いので、不安となり、アロンの周りに集まって、金で若い雄牛の鑄造を作ってしまうのです。そしてこれを「エジプトの国から導き出した神々だ」と拝んでしまうのです。主なる神様がどんなにイスラエルの人々を、大切にしようと思っても、そして恵みを与えても、イスラエルはすぐに離れていってしまう。これが『聖書(旧約)』が示す、主なる神様とイスラエルとの現実的な関係です。

主なる神様と、イスラエルの人々との、理想的な関係と現実的な関係、それらから見出される事柄は、徹底した人間の愚かさ、それでもそのような人間を、たくさんの恵みをもって、愛そうとされる主なる神様の姿の両方です。もちろん、学ぶべきは主なる神様の愛です。

さて、そのような主なる神様の愛についての記述は、本日の使徒書にもあります。「**しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対する愛を示されました**」(ロマ 5:8)とある通りです。今も律法を通して主なる神様の愛に応えようとする人々がいます。しかし、わたしたちは、イエス様が示して下さった愛を心に刻み、わたしたちの教会ならではの在り方でその愛を示す集まりです。その歩みは、世界が真の平和を迎えるまで続きます。その歩みをこれからも続けたいと思います。イエス様を通して示された主なる神さまの愛に守られて続けたいと思います。